

喜劇

ときめきリーフノベル

文・高安義郎 絵・芝 章一



一人息子が大学生になり家を離れる
と松子は急に手持ちぶさたになつた。
そんな折、松子の女子高時代の仲間の
キーキー子が尋ねてきた。キーキー子は学生時
代演劇部に所属していたが、現在その
時の仲間を中心にして作った小さな劇
団の一員だった。キーキー子は松子に劇団
に入るよう勧めに来たのだ。松子も少
しづかれて演劇部にいた経験もあり、す
ぐに入団したのである。

松子の夫は町役場に勤めるまじめで
優しい男だった。松子が劇団に入団し
練習で夜遅く帰宅しても文句一つ言わ
ず、「今度見に行くよ」と応援さえし
てくれた。

劇団は丁度過渡期にあつた。これま
で公演してきた出し物は観客が見飽き
ているようで、劇団存続の為にも何か
新しい物に挑戦すべきだという機運が
高まっていた。丁度そんな時期にリー
バーが体調を崩して入院し、キーキー子が

「新しい劇のアイデアはみんな任せ
せる」とリーダーは言つてたわ」キーキー子
の呼びかけに、数日して出された案は
喜劇に挑戦しようということだった。
「喜劇の台本、何にしようか。既成の
シナリオぢやつまんないし。良い物も
ないしさ」
「吉本の真似したつてしまふがないし
ねえ」

「いいや演劇は娯楽よ。芸術なんて思
わなけりやいい」

「そりや違う。演劇こそ総合芸術よ」

「いいや演劇は娯楽よ。芸術なんて思
わなけりやいい」

の

「いいや演劇は娯楽よ。芸術なんて思
わなけりやいい」

の